

武内清様

急に冬になって体調はいかがですか 私は衣類寝具であたふたしました

「Ⅲ学校教育」からご本を読み始めました 「5 アクティブ・ラーニング」でいささか驚かされました 取り上げられているテレビ番組は私も見たような記憶がうっすらとあります 授業担当の先生が テレビ取材ということで 張り切って典型的な場面とかうまくいった例を取り上げ強調して「模範授業」を行ったのではないのでしょうか 生徒中心にという授業には相当な準備が先生にも生徒にも必要なはずだと考えます このような取り組みを毎時間ではないにしても年間を通して行なっているとしたら 教科書、学校、文部省といったハードルを越えるためにかなりの工夫、努力をしていることでしょうか

驚いたのはその後引用されているオーストラリアの教育学者の弁です 教室での講義中心教育について旗色が悪いと認識していましたが 逆のこれほど高評価の意見があるのですか 例にあげられている国では なるほどAIだかITだかの分野で抜きん出た人材を輩出しているようです 成果は国の土台を構成する人々の意識や生活やに及んで皆さん心も懐も豊かになっていることでしょうか あるいは近い将来そうなるということでしょうか

アクティブ・ラーニングは 市川学園の理念の「第三教育」に似ている気がしますが 学園の方は教科書中心としての発想 と理解するならテレビ番組の学校が目指しているらしいのとはちょっと違うのだろうか・・・などなど横になって目をつむると思い出して考え始めるとあれこれあっちこっちと妄想が続き広がり 寝られせん むかしむかし先生稼業していた という記憶からいまだに卒業できていないのでしょうか

ところで 誤植の件です 中高そして図書館職員時代に校正を経験して いささか自信がありましたので サイドビジネスで小遣いかせぎになるかと 校正の通信教育を受けました 最初のテストでボロボロになりました ひっかけじゃないのか! と文句を言いたくなるほどショックでした 「校正恐るべし」という良く知られた言葉通り 奥深く難しい作業であることを思い知りました 現在は自分の文章を自分で校正していますので 脱字誤字誤意についてはさらに気づきにくくなっていて 要注意と肝に銘じています

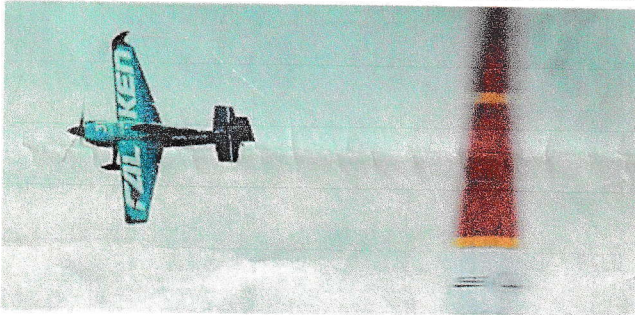
ところでその 2 ホテルの件です 見浜園には父を案内したことがあります 静かになによりひとけのないのが気に入りました 近くにはすでに大きなビルがいくつもありません ホテルから幕張海浜公園は見えるのでしょうか この浜辺を観覧席にして「レッドブル・エアレース」の日本大会が開かれました ヒコーキの話です ヒコーキのことなら少し自信をもってお話しできます

ではまた
十月十日

辻 秀幸

レッドブル・エアレース

曲技専用プロペラ小型機でのタイムレース。世界中の曲技飛行パイロットのトップクラス十数人による W 杯という趣向。スキー回轉競技の飛行機版。車の F1 のように機体や競技のルールがキッチキチ。その結果、機体は見た目も性能もほとんど変わらず、私には塗装の違いでしか区別できない。しかも競馬場ほどの範囲で



幕張での日本大会 読売新聞・2019/9/8朝・千葉面 から

1秒の1/10、1/100を競うので、飛ぶコースも限られることになり、見た目では色違いだけのヒコーキがおなじコースをなぞるように飛ぶのを見ることになる。観客はクルレックルと軽快な飛び姿や爆音の迫力を堪能できる。テレビだと、飛行の軌跡を重ねてわずかの違いがスピードの差になることを説明したり、チェックポイントでの機体のわずかなルール違反をストップモーションで見せるなどしてくれるので、わかりやすく面白い。

上写真で、ぶれて写っているのがチェックポイントのパイロン。機体がやっとなれるほどの狭い間隔で2本立つ。下写真で、機体前方に小さく柱のようなものが2本セットで2箇所立っているのがわかるだろうか。これがパイロン。この2本セットの間を通過する時の姿勢やスピードが指定されていて、わずかも外れると減点。パイロンは機体が触れると簡単に裂ける。パイロンは機体に傷をつけず絡まらない素材で出来ている。直ちに治す。この時の作業員の様子がこれまた見事。観客の楽しみの一つとなっている。

コースを折り返す際の急旋回でかかるG(重力)には、パイロットと機体を守るため上限が規定されている。オーバーすると失格。

というようにパイロットには神業のようなテクニックが要求される。ハイテク時代ということで、瞬間のスピードは勿論、姿勢やGなどの数値をリアルタイムでパイロットは知る。時にパイロンを通過し損なってコース離脱、そんな様子も見られていいアクセントになる。

下写真はどこか分からないが、幕張に置き換えたとするなら右手の陸地が海浜公園で観覧席。今まさに正面の、コース最初のチェックポイントであるパイロンに突入しようとする場面だろう。浜辺のほかにも、競馬場でも開催した。競技機は別の場所にある飛行場(幕張の時は木更津)で待機し発着する。

各国を転戦して大会ごとにチャンピオン、そして年間のチャンピオンを決める。日本では幕張の前は、浦安市総合公園だった。莫大な費用に見合う収入がなかったからだろうか、ふんだんにガソリンを爆発させてCO₂



テレビ画面から いどこか記録紛失につき不明

を盛大に造りだすせいでだろうか、2019年の幕張大会を最後に「レッドブル・エアレース」中止。

第2次大戦後のアメリカで流行ったころは、生き残り戦闘機や攻撃機が何機も一緒に飛んで速さを競ったようで、迫力満点危険がいっぱいだったに違いない。日本の世界的有名戦闘機「零戦」も実機や二セモノが飛んだ。レースではなく、空戦を再現したアトラクション。零戦は、常に煙を吐き出して墜落(観客の視界から消える)する役回り。

ヒコーキ発展初期などの古典機を復元して飛ばすショーも盛んらしい。今もこういったエアショーは続いていると思うが、航空情報から遠ざかって久しいので解らない。